

住職と行政書士が語る終活

心と暮らしを整え 今を生きる

終活 展望

人生の終わりのための準備活動、略して「終活」が昨今さまざまな形で取り上げられている。自分自身の最期を見つめることは、決して暗いものではない。限られた時間を意識することで日常のありがたさに気づき、感謝の心も芽生える。そして残る人生をより豊かなものにする一歩につながる。人々の心に向き合う住職と地域で寄り添う行政書士が終活をテーマに語り合った。二つの視点から浮かび上がる「今を生きる」ヒントとは――。

「終活」の言葉を意識し始めたのは。

後藤さん 言葉自体は2008年ごろにあったが、たぐさんの命が失われた2011年の東日本大震災後に意識するようになった。

伊藤さん 私も震災後、仮設住宅で大人向けの絵本の読み聞かせをし、九死に一生を得た被災者の話を聞く中で、終活の必要性を強く感じた。

――終活相談で印象深いのは。

後藤さん 25年ほど前、年配の姉妹が寺を訪ねてきた。姉妹はそれぞれ嫁ぎ先の墓に入るが、実家の墓もあるという。でも見る人がいないのでどうすべきかと。将来を見据えた話だったが、当時は即

答でできなかった。これがかつかけとなり、16年前、大きな墓石を持たず維持管理を軽減した樹木葬を始めた。

――姉妹の相談は現代の墓じまいに通じる。

後藤さん 家族、親戚の順で話し合うことが大事。中には親戚で墓を守ってくれる人がいるかもしれない。墓を移すか、樹木葬などにするのかはその後の話。墓じまいをしても先祖に対する供養は今後も続く。

――最後に2人から見た幸せな人生の終わりの方とはどんなものか。

伊藤さん 「私の人生はどうだったか」と自分に問いかけ、その答えが良かった、幸せだったと思えればそれでよいのでは。

後藤さん 宮城出身のコメディアン、たこ八郎は「迷惑かけてありがとう」を座右の銘としていた。死去後は自分の力ではどうにもできず、誰かのお世話になる。迷惑をかけても大丈夫のような関係を築いておくことは大事。「今を生きる」上では、人のつながりを重視してほしい。

※ ※ 「終活」と一言でいっても内容は多岐にわたる。また、人それぞれに優先させることは異なります。石巻日日新聞では読者の皆さんのヒントとなるよう、終活を見据える企画「終活展望」を随時掲載します。ご意見、ご提案をお寄せください。

11月に終活セミナー
講話と個別相談会
一般社団法人てあわせ主催、石巻日日新聞社・石巻観光協会共催の第1回終活セミナーが、11月1日午後2時に石巻市かわまち交流センターⅡ同市中央二丁目Ⅱで開かれる。参加無料、定員50人。申込みは石巻日日新聞社

(21-5233)で9月20日から行う。
てあわせ理事長で観音寺・石巻市皿貝Ⅱ住職の後藤泰彦さん、桃生町在住で行政書士の伊藤桂子さんがそれぞれ講話する。その後は

葬儀社、石材店、遺品整理、生前整理、行政書士がそれぞれブースを構え、個別相談に対応していく。

対談する観音寺の後藤住職と行政書士の伊藤さん



後藤泰彦さん(ごとうたいげん)

石巻市出身。同市・観音寺住職、一関市・常堅寺住職、(一社)てあわせ理事長、終活カウンセラー。東日本大震災後、復興団体のてあわせを設立し、復興の千本桜植樹、鎮魂の森と慰霊塔の建立などを行った。

伊藤桂子さん(いとうけいこ)

石巻市桃生町在住。行政書士として遺言や終活、農地手続き、建設業申請手続き、ハラスメント研修など暮らしに関わる全般の相談を受ける。保護司、石巻市国際交流協会理事、石巻市社会教育委員などを務める。

対談者紹介